
勇者みたいなイケメン従者と目付きの悪い勇者

コロシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者みたいなイケメン従者と目付きの悪い勇者

【Nコード】

N1762P

【作者名】

コロン

【あらすじ】

俺は紅堂海斗
くどうかいと

人がせっかく気持よく昼寝していたのに、変な世界に連れてきやがって。しかも勇者をやれだ？ふざけんな。他人を助けるつもりなんざさらさらないぜ。

——あ？こいつら俺と宗（イケメン…天輝宗（あまきしゅう））を間違えて、俺の方が勇者ではなく、従者だと思ってやがる。はっ！こいつぁ傑作だ。

…んじゃそういうわけで、後のことはまかせたぜ。宗。

※難しいことはヌキでいきましょう。なぜならこれは単純と書いて《ベタ》と読む物語だからなのです。

一 超美小年と怖い奴。(前書き)

意味不明な点やその場にふさわしくない表現などがあると思われるので、ご了承ください。

一 超美小年と怖い奴。

勇者？

———懐かしいな。

そんな風にいわれたこともあったっけ。

＊ ＊ ＊

漆黒の闇の中、数十人の人間が石造りの塔の頂で、1つの魔法陣を取り囲んでいる。

それを希望の眼差しで見つめる者

警戒する者

祈るように眼を閉じる者。

それぞれだった。

魔法陣はその期待にこたえるかのように、エメラルド色に輝きはじめる。

———おおおお…！！

群集の感嘆の声のなか、白い光があたりを飲み込む。

やがて強烈な閃光を放った魔法陣の少し上空に、2人の少年が現れた。

「んがあっ!!」

そのうちの黒髪の少年は、群衆のしている目の前で見事に、顔面から墜落した。

＊ ＊ ＊

「……う……こ、ここは一体……？ さっきまでたしか学校にいたはずなのに——」

もう一人の少年が呟く。

栗色の髪と茶色の瞳が美しい、イケメン超美少年だ。

「……し、宗。た、頼むから……早く……早く降りてくれ」

「うわっ!!!!」

宗は自分の下から声がしたので、びっくりして飛び退いた。

「か…海斗!？」

宗の下敷きになっていた、海斗と呼ばれた少年は唸りながらゆっくりと立ち上がった。

宗とは対照的な鋭い目付きをした海斗は、見ているだけでも威圧感を感じる。

「どうやら夢じゃあないみたいだな…こいつらなんなんだよ」
眼の端で群衆を睨みつけた。

「海斗…ここはどこなんだ？」

「俺に聞くな。知らん」

白い布を身に纏った男と女が、海斗たちの前に出てきて、跪いた。

「勇者クドウ様…この世界を、お救いください」

「…はあ？」

「え？ちよつとま——」

抗議する間もなく、群衆たちも跪いた。

『勇者様、我々をお救いください』

「————っ?」

立ち尽くす二人に、群衆は微動だにしない。

海斗は溜め息をつく。

『————RPGゲームかよ…』

そんな声が、聞こえた気がした。

＊ ＊ ＊

「あ、あの…勇者って…どういうことなんですか?」
とりあえず状況を理解しようと、宗が尋ねる。

「そうですね…いきなりこう呼び出されては戸惑うのも、無理はありませんね。————約2500年ほど前に封印された『ヴィロ
ー・デウス』という絶望の魂が、大魔王の復活と共に蘇りつつある
のです」

「魔王ねえ…」

海斗はげんなりとした顔で宗を見た。宗は信じられない、という顔つきだ。

「それを破壊してもらわなければならないのです。復活し『覚醒』すると、この世の中の生きるものすべてが絶望、欲望、憎悪に飲み込まれ——…つまり地獄と化すると、言われております。それを破壊できる存在というのが———」

「勇者？」

「そうです。その勇者の一人としてクドウ・カイト様、その柱となる第一従者、アマキ・シュウ様がここ『月の塔』の使者として選ばれました」

「おいおい、なんかややこしい単語がでてきたぜ」

「あのー…」

宗がもう一つ質問する。

「第一従者、勇者の一人…他にも選ばれた人たちがいるってことですか？」

神官は目を輝かせ、宗に向かって叫んだ。

「その通りです。その方々と力を合わせ、ヴィロー・デウスを破壊してほしいのです、クドウ様!」

神官は宗の手をとる。

「? ? お、俺は、海斗じゃ――」

――勇者万歳! 勇者万歳! !

宗が言い終わらないうちに、歓喜が沸き起こる。

慌てふためいて海斗の方に目をやると、腹を抱えて笑っている姿が見えた。

「――――お前、途中から絶対気付いてただろ」

宗の思いも虚しく、まだ海斗は笑っている。

「こいつぁ傑作だ。あぁっはははははは！！」

＊ ＊ ＊

目付きが悪いせいもあっただろうけど、俺には海斗が勇者じゃなくって、悪魔に見えた。

一 超美小年と怖い奴。(後書き)

もう訳わかんなくてすいません。

二 一つ木の下、神童と問題児（前書き）

すいません。

今度はいきなり過去話です。

セリフばかりで読みづらいかもしれないです。

二 一つ木の下、神童と問題児



——ドサドサツ。

まだ高校に入学してからまだ3ヶ月。なのに朝っぱらから靴箱の中には、大量のラブレターが入っている。しかも毎日。ここまできると、もううれしいとか幸せとか通り越して、大迷惑。

これが『神童』と呼ばれる、天輝宗の日常の生活。

成績も優秀、常にトップ。スポーツ万能。性格良し。（顔はいうまでもない。）

どこを取ってもいいとこしかない。そう、まさに宗は、誰もが憧れる、『神童』だったのである。

宗の周りにはいつも女子か、ご機嫌取りかがいた。そうでなければ先生がいる始末だ。

お世辞や機嫌取り——宗はこういうのが、実は大嫌いだった。

そんな宗の唯一の楽しみは、昼休み校庭の裏側に行き、一列に並んだ低い木の下で横になって、青空を見上げることだった。

こうしていると、空は広がった。自分がちっぽけなようにも思えてくる。変な話かもしれないが自分がここにこうしていることすら、不思議だった。

—————そういえば、なんでいつもここは人がいないんだろう。

そんなことをぼーっと考えていると、いきなり上からぬっと人の顔が現れた。

「うわあああっ!!!」

「……おい、そんなにびっくりしなくてもいいんじゃないか？」

（————し…心臓が止まるかと思った…。）

宗は目を見開いたまま、少年は逆さづりになったまましゃべり続けた。

「お前、天輝宗って奴だろ。最近、いつもここに来てるな」

「…そ…そうだけど…」

「……ふーん……。意外と、普通だな。もっと偉そうにしてる奴か
と思ってたぜ」

少年は身体を前後に揺らした。

宗は初対面からそんな口調で言われても、不思議と嫌な感じはし
なかった。

この少年からは、お世辞やご機嫌とりたちのような濁った気配は
感じられなかった。

…——あ。思い出した。「この学年にも変わった問題児が
いるんだよね」って、誰かが言っていたっけ。

＊ ＊ ＊

「そんなに変わった問題児なの？」

「そうですよお。授業にはまともに参加しない、問題行動ばっか
起こす凄い奴」

「おまけにこの間なんか教頭に喧嘩売ったって。勇気あるよなー」

「でもでも、退学にはならないんですよー」

話の内容が気になったので、とりあえず尋ねる。

「?どうして」

宗の久々の反応にご機嫌取りたちが先を争う。

「そこが変わってるんです。ほら、試験結果で宗さんの次にいつもいる奴がそいつですよ」

「危なかったですねえ。この間なんか5点差だったじゃないですかあ」

「そうそう。この学校がつい最近、教育委員会の間で有名なのも宗さんとそいつのおかげなんですよ。理事長なんか偉そうにしちゃって」

「なんてったって、今そいつが抜けたら面目丸つぶれですよ。向こうはこっちの都合なんざ知ったこっちゃないですしね」

「しかもそいつ、学校と喧嘩以外の行動が一切謎でしでねえ…裏で一枚噛んでるって噂も…」

「…凄いね。———知らなかった」

「いやいやあ。俺等も最近知ったばかりですよ?…ま、あんな奴が宗さんになうはず、ないけどね」

…

…

…

なんか名前が出てこない。

でもだれもここに寄りつかない理由は、分かった。

* * *

「——おい。：おい、どうした？——ホントにお前、あの『神童』かあ？ぼーっとしてよ」

「あ：ああ。ちょっと考え事してて」

「ホント、変わった奴だな。——どうでもいいが、昼休み、終わっちゃうぞ」

海斗が指さした方向をみる。

なんと、今にもチャイムがなりそうだった。

「あっ…やべっ！もう行かないと。————行かないのか？」

平然と答える。

「は？行くわけねえじゃん」

はは。————予期していなかったわけではなかったが。

宗は振りかえって立ち止まった。

「あ…あのさ、またここに来て、いいかな」

「…あ？俺の土地じゃねえし、来たいときにくればいいだろ。なんで俺に聞く？」

宗は笑った。何だか可笑しかった。

…あれ？

————やっど、思い出した！！あいつの名前！

目がつりあがった黒い髪の少年ははまだ逆さづりになったまま、記憶と重なるように大声で叫ぶ。

「俺、紅堂海斗ってんだ！しっかり覚えとけよ！！」

これが、二人の腐れ縁の、始まりとなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1762p/>

勇者みたいなイケメン従者と目付きの悪い勇者

2011年11月14日22時27分発行